

ミルク

笠羽流雨

□場所

東京。

アーケード商店街の古びたお好み焼き屋「ひぐらし」及び、その近くの河原。

□人物

木戸 涼平……高校二年生、演劇部。戯曲を書いている。

大野 亜紀……高校二年生。涼平の幼馴染。理系で天文マニア。

泉 渉……高校二年生。涼平の幼馴染。美術部部长。家は銭湯「あけぼの

湯」を経営。父龍太は画家。

木戸 荘司……五〇代。涼平・陽向の父。「ひぐらし」の店主。

新田 洋一……六〇代。下町のレンズ職人。「ひぐらし」の常連。

木戸 陽向……中学二年生。「あけぼの湯」の常連。いつも牛乳を飲んでいる。

片桐 鈴……大学二年生。畜産学科。

木戸 那津……三〇代半ば。荘司の新しい妻。

木戸 春江……荘司の前妻で、涼平・陽向の実の母親。音楽を志して外国へ旅立った。

黒 子……すべてが不詳。通常の黒子同様舞台上の雑務もこなす。

【あらすじ・概要】

東京の古いアーケード商店街でお好み屋を営む木戸荘司は前妻の春江に捨てられて以来、彼の二人の子供である涼平と陽向を男手一つで育て上げた。涼平は高校では演劇部員として戯曲を書いているが、実の母春江との失われた時間へのこだわりから、スランプ状態に陥っている。そんな中、時折お好み焼き屋に顔を出すようになった那津は荘司の恋人だった。荘司と那津の再婚を受け入れられずにいる涼平。しかし、彼の友人渉と亜紀、妹の陽向、那津の姪の鈴、下町の職人新田との温かな関りによって次第に自立してゆく。小説『銀河鉄道の夜』に導かれるようにして、それぞれの登場人物が忘れていた輝きを見つける群像劇。

○夜桜

舞台は暗闇。

河原、夜桜の下。

涼平、懐中電灯をつけ、地面のあちこちを照らして何か探している。

涼平 おかしいなあ……俺は確かにここにいたはずなんだけど。桜の花びらが舞い散る中、あの人と一緒に……。

陽向、懐中電灯をつける。

陽向 お兄ちゃん、何探してるの？

涼平 素直で可愛かった頃の俺。

陽向 え？

涼平 いや、何探してるのか忘れた。

陽向 ふーん。あ、桜もうすぐ咲くね。ほら、蕾があんなに膨らんでる。

涼平・陽向、同時に懐中電灯を切る。完全な闇。
音楽。明転。

○ひぐらし

四月。お好み焼き屋「ひぐらし」のカウンター。

莊司・那津、声をひそめて話している。

涼平、机に向って何か書いたり消したりしている。

那津 そろそろ、伝えたほうが良いんじゃないの。

莊司 タイミングが難しいよ。

那津 でも、今の関係が続けるわけにはいかないと思う。

莊司 そうだよな……。

那津 大丈夫よ。

莊司 分かった、話してみるよ。

那津 うん、今日はもう帰るね。

莊司 おう。

那津 じゃあ、また。
莊司 気をつけてな。

那津、断ろうとする莊司の手に食事の代金を渡して店を出る。
亜紀、入ってくる。

亜紀 こんにちは。

莊司 あ、亜紀ちゃん。涼平、そこ片づけてくれないか？

涼平 なに？ あ、亜紀。

亜紀 ういっす。この全集面白かったよ。

涼平 何が良かった？

亜紀 うーん、『銀河鉄道の夜』かな。

涼平 ああ、やっぱりね。

亜紀 分かる？

涼平 だって亜紀、天体マニアじゃん。

莊司 亜紀ちゃん、ついでになんか食べていきなよ。

亜紀 ああ、じゃあ、アイスコーヒー。

涼平 俺は、ネギ玉で。

莊司 お前は手伝えよ。

涼平 高校生は忙しいんだよ。

莊司 遊んでばっかに見えるけど？

涼平 遊んでないよ。脚本書いてて忙しいの。

莊司 ほう。

涼平 夏の大会で使うやつのプロットもそろそろやらないと。

亜紀 大会？ あれ、涼平って演劇部だよな？

涼平 演劇部にも大会あんだよ。

亜紀 へえ。面白いね。

涼平 馬鹿にしてる？

亜紀 いや。で、脚本はどこまで書けたの。

涼平 どこまでも何も一文字も書けてないよ。

莊司 お待ちどうさま。あれ、スランプですか、涼平先生。

涼平 うっせえな。

渉、入ってくる。

渉 こんにちはー。

莊司 渉くん。らっしやい。

渉 あ、お前らまたいちゃいちゃしてんのかよ。

涼平 してねえよ。

渉 ホントかなあ。なんか今くつついてただろ。

亜紀 なに渉、妬いてるの？

渉 ちげえよ！……ちげえよ。（二人とは少し離れた場所に座りながら）

亜紀 繊細だよね……。

涼平 渉、こっちおいで。

亜紀 おいで、おいで。

渉 そこまで言うならしようがねえなあ。

亜紀 おお、来た。

渉、二人のテーブルに席を移す。

渉 なんか今日、表のアーケード暗いですね。

莊司 このあいだ季節外れの雷があったろ。

渉 あー、あった、あった。

亜紀 怖かった。

莊司 その時の落雷で配線が切れちゃったんだよ。

渉 え、マジで？ こえー。あ、えっと、とりあえずシーフード玉の大盛り

チーズのトッピング、と焼きそばもんじや。

莊司 今日も食うね。

渉 食ってないとやってらんないっすよ。予備校だけじゃなく、部活もハードだしね。

亜紀 部活って、美術部でしょ。

渉 美術部なめんなよ。超体育会系だから。夏休みには合宿もあるんだよ。

涼平 え、合宿？ 高山でランニングとか？

渉 高山に絵の具とこんなでっかいキャンバスかっいで登るんだよ。

亜紀 進路はやっぱり美術系？

渉 進路……そうだな、俺、他に才能ないし。

涼平 確かに、絵は上手いよな。

亜紀 あ、この前美術館でお父さんの絵、見た。

渉 親父の？

涼平 天才画家の息子かあ。

渉 天才ねえ。でもお前だって天才音楽家の……いや、いや。

莊司 はい、お待ち。絵はお父さんに教わってるの？

渉 まさか。予備校ですよ。

莊司 そうなんだ。

渉 亜紀は進路決めた？

亜紀 全然。勉強はしてるけど。

渉 さすが。

涼平 亜紀は真面目だよな。

亜紀 真面目とかじゃないよ、好きだからしてるだけ。

涼平 へえ。

亜紀 じゃ、あたしはそろそろ帰るわ。

渉 え、もう帰るの？

亜紀 うん。お会計お願いします。

莊司 あー、いいよ、いいよ。無理にひきとめちゃったし。

亜紀 え？ あ、じゃあ、ごちそうさまでした。

莊司 暗いから気をつけてね。

亜紀 はい。(入口でふと立ち止まって)……桜、もうすぐ満開だね。

亜紀、店を出て行く。

涼平 あ、そうだね。

渉 涼平はいいよなあ。

涼平 え？

渉 莊司さんみたいなイケオジがいてさ。

莊司 イケオジってなんだ？

涼平 そうか？

莊司 え、イケオジってなんだよ。

渉 うちの親父、最低なんですよ。

莊司 龍一さんが？ この辺じゃあ有名人だけどね。あけぼの湯の隣のお店買

ってアトリエにしちゃったんでしょ。

渉 良く知ってますね。

莊司 テレビで見たよ。

渉 あー、なんか来てたな。

莊司 絵、教えて貰えばいいじゃない。

渉 無理っすね。あの人、自分のことしか考えてないから。

莊司 ふうん。

陽向、帰ってくる。

莊司 お帰り。

涉 よ。

陽向 ん。

陽向、牛乳を取り出しパックのまま直に飲み始める。

莊司 おいおい、口付けて飲むなよ。

陽向 どうせすぐ飲んでじゃうんだからいいの。

莊司 しょうがねえな。あ、焼きうどんでも食うか？

陽向 うん。

涼平 陽向、どこ行ったの？

陽向 どこって、友達のところ。

涼平 誰のとこだよ。

涉 俺ちだよなあ。

陽向 なあ。

涼平 え、お前らそういう関係だったの？

涉 ばか、銭湯の方だよ。

涼平 また？ じいさんはあさんと友達になって楽しいの？

陽向 若い人も来るよ。新田さんとかさ。

莊司 あの人、六〇代だろ。

陽向 え、若くない？ あ、それより聞いて。富士山の絵が新しくなったんだよ。超怖い。

涼平 現代アートかあ。

莊司 お父さんが描いたの？

涉 まあ。

莊司 さすが商売上手だな。

陽向 凄い人だからだったよ。

莊司 だろうな。

涉 ごちそうさま。お金、ここ置いときますね。

莊司 おう、また寄ってね。

涉 じゃ。

涼平 じゃあな。

陽向 ばいばい。

渉、店を出て行く。

涼平 さっきのお客さん、最近よく来るよね。

荘司 さっきのって？

涼平 カウンターにいた人。

荘司 ああ、那津さんね。

陽向 お父さんと仲良しの人？ 那津さんっていうんだ。友達？

荘司 んー、友達っていうわけじゃないんだけど……なんつーのかな。

涼平 借金取り？

荘司 そんなふうに見える？

涼平 隠し子？

荘司 なわけないだろ。

陽向 占い師？

荘司 え、お前そういう友達いるの？

陽向 いい人だよ。占いは当たらないけど。

涼平 銭湯に来てる人？

陽向 もちろん。

荘司 ……とここでさ、お前らにちよっと折り入って話があるんだけど。

音楽。

○ぼんやりと白いもの

夜の河原。

渉、ぼんやりした様子で星空を眺めている。

涼平、ゆっくり歩いてくる。

涼平 よ！

渉 うわあ！

涼平 なにやっつてんだよ？ こんなところで。

渉 いや、絵の構図考えたりとか……まあ、いろいろ。

涼平 ああ、そうか。

渉 なんか、元気無いなあ。

涼平 ん、ちょっとね。

渉 なんだよ、話してみろよ。

涼平 ……親父、再婚するかもしれない。

渉 ええっ、まじか。えっと、まじか。

涼平 今日は空気が澄んでるな。

渉 え？

涼平 《ではみなさんは、そういうふうには川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか？——①》

渉 えっ……。

涼平 《ではカンパネルラさん。——①》

渉 えっ……。

涼平 天の川だよ。

渉 なんだよ、それ。

涼平 銀河鉄道の夜だよ。

渉 なんだっけ、それ。

涼平 宮沢賢治だよ。今度貸そうか。

渉 へえ、難しそうだし、いいや。

涼平 そうか。

渉 でも、こんな場所でも、星、結構きれいに見えるんだな。

涼平 うん。

音楽。

○一家団欒

五月。

お好み焼き屋のテーブルに、荘司・涼平・陽向・那津、それぞれ緊張した面持ちで向かい合って座っている。

荘司 おっ、焼けたぞ。みんな食べろ。

那津 あ、おいしそ。

荘司 うまいに決まってるだろ。今日のはスペシャルだからな。これ、ほら、クラゲが入ってるんだよ。クラゲ。クラゲ。クラ……。

気まずい間。

那津 ……え、クラゲ？

莊司 もんじやも行くか？

那津 そうね。

莊司 ほらほらみんな手出せー。うまいぞ。こっちはなあ、イソギンチャクがはいってるんだよ。

那津 イソギンチャク？

莊司 そう。イシワケイソギンチャク！ 東京では滅多に手に入らないしろものだぞ。食えー。こげちゃうぞお！ まあ、おこげもおいしいけどな。お父さん食べちゃうぞお……。あー、食べちゃった……。

耐え難い間。

莊司 まだ正式に書類を出したわけじゃないんだ。お前らの意見もちゃんと聞いてだな。

涼平 なんだよ、意見って？

莊司 なんでも言ってみろ。

涼平 なんでも？

莊司 お前ら、来年は高校と大学とダブル受験だろ。いつまでも店を手伝ってもらうわけにはいかないと思うんだ。だからだなあ……。

涼平 頭を整理させる時間がほしい。

莊司 まあ、そうだよな。陽向は？

陽向 実感わかないなあ。お母さんがいるってどんな感じなんだろう。

莊司 そうか、そうだよな。すぐについていう話じゃないんだ……。とにかく食べ。デザートにあんこ巻き行くか？

陽向 ああ、うん。

莊司 持ってくるから待ってな。

莊司、厨房に入って行く。

三人、無言。

那津 涼平君と陽向ちゃんよね。……素敵なお名前。

涼平 母のつけた名前です。

那津 ……私たち、まだ今日出会ったばかりで、まだきつとお互いのことも

知らないかもしれないけど、私はね、もっと二人のこと知りたいと思ってる。

涼平、出ていく。

那津 待って。

音楽。

雨の音。

○酒と牛乳

六月。

お好み焼き屋のカウンターで、莊司・新田、酒を飲んでいる。

莊司 ってな感じでさ。

新田 一家団欒。楽しそうじゃないか。

莊司 からかわないでくださいよ。

新田 でも、春江さんに出て行かれてこの十年、長かっただろ。

莊司 あんな素敵な人と出会えるとは、人生も捨てたもんじゃないですね。

新田 はいはいはい。まあ、あれだな、燃え尽きないように気をつけなさい。

莊司 燃え尽きませんよ。

新田 でもね、新しい母親が出来ていきなり懐いちゃう方が変な話だよ。

莊司 そうだよなあ。

新田 俺も若いころは……いや、で何の話だっけ。

莊司 涼平のヤツ、再婚の話を出してからずっとあんなでさ。夜になると河原で星を見ているみたいなんだよ。

新田 星か。まあ、そういうお年頃だから。あ、これもう一杯頼むよ。

莊司 飲み過ぎですよ。

新田 お前に言われちゃおしまいだな。前はひどかったから。

莊司 そうでしたっけ。

新田 ま、よくがんばった。はい、もう一杯。

莊司 ダメですよ。

新田 いいのいいの、たまには飲まないで。

莊司 もうそんな若くないんだから。

新田 俺はまだ現役だよ。若い奴には負けんぞ。
庄司 え、レンズエって若い人とか来るんですか？
新田 ああ、工学部卒のヤツとか結構来るよ。
庄司 じゃあ、新田さんのところは安泰ですね。
新田 まあな。
庄司 うち俺の代で終わりかな。
新田 涼平君は？
庄司 まさか。あいつは大学へ行きますよ。
新田 そうか。あ、そうそう涼平君の誕生日ってそろそろだっけ？
庄司 よく覚えてますね。
新田 まあね、記憶力だけは昔から良いんだよ。
庄司 さすが。
新田 じゃあなんかやらんとな。
庄司 そりゃあ、ありがたい。

涼平、帰ってくる。

涼平 ただいま。あ、新田さん。
新田 お、よう。
庄司 何処行ってた？
涼平 河原。
庄司 そうか。……まあ、あんまり夜更かしはするなよ。
涼平 うん。あのさ、お父さんはなんで再婚しようと思ったの？
庄司 それは。
涼平 お母さんのことはもう忘れた？
庄司 そりゃあ、だから、お前らのこともあるしさ。
涼平 お母さんなんていららないよ。
庄司 ……。
新田 まあ、そうだなあ……。
涼平 それだけ。おやすみ。

涼平、自室に向かう。

庄司 どうしたもののかねえ。
新田 乳離れ……できてないのかもな。
庄司 乳離れ？

新田 多少早熟なところはあるだろうが、涼平君だってまだ大人じゃないんだよ。大人の理屈じゃ通らないことだってある。

庄司 もっと、甘えたかったのかな。

新田 ああ。それに、子どもには甘える資格がある。

庄司 そうか……。

新田 でも、お前は那津さんのこと、愛してるんだろ。

庄司 当たり前でしょ。

新田 ね、どういうところが好きなの？

庄司 聞きます？

新田 もったいぶんなよ。

庄司 あの人はね……こんな俺を愛してくれるんですよ。

新田 ほう。で？

庄司 分かんないかなあ、つまり俺にとっては女神様なんだ。

那津、店に入ってくる。

那津 こんにちは。……あれ、二人で飲んでるの？

新田 おっ、うわさをすれば。続きを聞かせてもらいましょうかね。

庄司 勘弁してくださいよ。

那津 何の話？

庄司 何でもない、何でもない。

新田 もうテレちゃって、可愛いっ。

庄司 新田さんそこ、どいて。ほら、那津が座れないよ。

新田 え、俺、もしかしてお邪魔虫？

庄司 いやいやいや。

那津 そんなこと。

庄司 なあ？

那津 ねえ？

新田 くそ、なんか、妬けるなあ。

庄司 いやいやいや。なあ？

那津 勘弁してくださいよ。ねえ？

庄司 那津さん、ここにお座りよ。今、冷えてるの出すからさ。はい、ジョッキ。

那津 庄司さん、ありがとう。

新田 もう、俺、帰るかな。

莊司 (ビール瓶を持ちながら) え、帰りますかあ？

新田 帰らないよ、帰らない。ね、那津さんはさ、こいつのどこがいいわけ？

那津 えー。

莊司 えへへへへ。

新田 お前が照れんなよ。

那津 安心するのよ。

新田 どういうこと？

那津 あたしね、結婚しようって約束した人がいたの。

新田 え？

那津 でも、式の二週間前に逃げられちゃった。

新田 まさか、結婚詐欺？

那津 ばかよね。それから人を信じられなくなっちゃって。

新田 そうだよなあ。

那津 でも、この人と出会えて気持ちが変わった。不思議ね。あ、ほらこの人不用器じゃない。ちよつと抜けてるけど、凄く正直で、かわいい。

莊司 ふはは。

新田 なるほどねえ。で、君たち、ぶっちゃけいつ籍入れるんだよ。

莊司 八月頃にしようかと思ってるんだけど。

新田 八月？ 二か月後か。

那津 涼平君と陽向ちゃんのことを考えると、それくらいかなあと。

新田 ふーん。ところで、さっきから気になってたんだけど、このつまみ何？
やたらうまいね。

莊司 何だと思えます？

新田 うーん、イソギンチャクみたいな形してるけど。

那津 イソギンチャクですよ。

新田 は？ はあ？

陽向、眠そうに入ってくる。

新田 あれ、陽向ちゃんどうしたの？

陽向 怖い夢見た。

新田 どんな夢？

陽向 んー、牛乳を飲もうとしたら、どんどんあふれて川になっちゃって。

新田 何それ、牛乳に溺れたの。

陽向 息ができなくて苦しかった。

庄司 そりゃあよくないなあ。
陽向 夢で良かったよ。ねえ、お酒っておいしい？
庄司 うまいよ。
陽向 牛乳のほうが絶対においしいと思う。
新田 そうかなあ。
那津 牛乳にはカルシウムがあるから。
陽向 そうなの。あたし、お父さんよりおつきくなるの。
新田 なるほど、いい心がけだ。確かに、パパより大きくなったほうがいいね。
陽向 ねえ、こんな時間に三人で何やってるの？
新田 密会だよ。
那津 何言ってるんですか、違いますよ。ただ仲良く飲んでただけ。
庄司 陽向も一緒に飲むかあ？
新田 ダメだろ。
那津 陽向ちゃんは牛乳を飲めばいいんじゃない？
陽向 うん。
庄司 そんなじゃあ、乾杯。
陽向 乾杯。

音楽。

○奇しうこそ物狂ほしけれ

夕食後のお好み焼き屋。

涼平、机に向かっている。

涼平 最近はおけぼの湯行ってないんだって？
陽向 そうかな？
涼平 渉が言った。
那津 陽向ちゃん銭湯好きなの？
陽向 あ、那津さん、一緒に行く？ 一緒に行こ。
那津 銭湯？ どうしようかな。
陽向 あれ、嫌い？
那津 いや、最近行ってないから。

陽向 それじゃちようどいいよ。行こうよ。

那津 そうね。じゃ、今日はお店休みだから、三人で行こうか。

陽向 いいね、いいね。あのね、あけぼの湯には面白い友達がたくさんいるの。
紹介してあげるね。

那津 えー、ホント？ 嬉しい。涼平君も行くでしょ？

涼平 俺、そんな暇じゃないから。

陽向 そうだ、お兄ちゃんは脚本書いてるんだよね？

涼平 まあな。

那津 でも、気分転換に銭湯に行かない？

陽向 銭湯って男湯と女湯と別れてるんだから、一緒に行ってもしょうがない
じゃん。

那津 そうかあ、残念。

陽向 ねえねえ、じゃあ行こうよ。早く早く。

那津 わかったわかった。

那津、陽向、出て行く。

涼平、なにやらぶつぶつ言いながら原稿をいじる。

鈴、興味津々にあたりを見回しながら入ってくる。

涼平 あれ、どちらさまですか？

鈴 こんばんはー。急にお好み焼き食べたくなっちゃって。

涼平 今日は定休日ですけど。表に看板出てるでしょ。

鈴 あれ、まじ？ 見えなかったあ。でも、君がいるじゃん。

涼平 いるけど。

鈴 じゃなんか焼いてよ。

涼平 と言われましても。

鈴 そういう態度とられるとますます食べたくなっちゃうなあ。うん、どうし
ても食べたい。

涼平 しょうがないなあ。ネギ玉くらいだったらできるかなあ。食べます？

鈴 食べます。

鈴、待ちくたびれてテーブルをはがしてコツコツ叩いて遊び始める。

涼平 コツコツやるのやめてもらえますか。

鈴 ああ、ごめんごめん。癖で。

涼平 この近くの方ですか？

鈴 家に帰るのにさあ、電車で間違えちゃって、下りたら全然違う世界でびっくりした。このへん、ずいぶん古い商店街だね。

涼平 時代錯誤感半端ないでしょ。

鈴 でも、この空気好きだなあ。

涼平 どうも。

鈴 どうすんの、これ。

涼平 あ、俺、焼きましようか？

鈴 焼いて、焼いて。そうやって焼くんだ。おもしろー！

涼平 うちでは大抵自分で焼きますけどね。

鈴 そうなんだ。あ、お好みで焼くからお好み焼き？

涼平 たぶん。

鈴 にやるほどなあ。

涼平 大学生ですか？

鈴 そうだよ。あ、私、鈴です。片桐鈴。君は？

涼平 木戸涼平です。

鈴 涼平くん！ 高校生？

涼平 はい。

鈴 じゃあ、私先輩だ！ よろしく！

涼平 テンション高いな……。片桐さんは大学では何をされてるんですか？

鈴 鈴って呼んでよ。

涼平 あ、はい、鈴さん。

鈴 畜産学です。

涼平 ちくさんがく？

鈴 家畜の生体機能や遺伝子の研究、あとは飼料開発なんかをするんだよ。あ

たしがやってるのは乳牛の飼育環境の研究。

涼平 へー。難しそう。

鈴 君、文系だな。

涼平 ド文系です。あ、焼きましたよ。

鈴 どれどれ、あちいいい！

涼平 あ、水、水。(水をとってくる)

鈴 ありがと。美味しいね。

涼平 どうも。

鈴 ここのお店っていつからあるの？

涼平 親父がだいたい若い時に始めたから三十年くらい前かなあ。

鈴 ひぐらしっていい名前だよな。どういう意味？

涼平 ……さあ、出て行った母がつけた名前ですから。

鈴 あ、そうなんだ。

涼平 まあ、シャッター街にはお似合いかもしれないけど。

鈴 そんなことないよ。≡つれづれなるままに、ひぐらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。——②≡文学的い。

涼平 徒然草でしたっけ、よく覚えてますね。

鈴 記憶力は良いほうなの。

涼平 俺も好きな文章、わりと覚えちゃうタイプです。

鈴 じゃあ、似てるね、あたし達。えーっと、えーっと、

涼平 涼平です。

鈴 そう、涼平君！

涼平 記憶力。

鈴 ごちそうさまです！ 美味しかったあ。いくらですか？

涼平 いくらかなあ。まあ今日はいいですよ。また来てください。

鈴 え、やった。また来ますね。

鈴、出て行く。

涼平、不審そうに見送る。

涼平 変な人だったな……。

涼平、再び机に向かう。

涼平の背後の障子に春江の影が浮かび上がる。

春江(声) 久しぶり。

涼平 あれ、どちら様ですか？

春江(声) 涼平。忘れたの？

涼平 え、忘れてないけど。

春江(声) 嘘。顔忘れてるでしょ。

涼平 顔……顔ね。

春江(声) あなたをそんな嘘つきに育てた覚えはないわ。

涼平 育てられた覚えはないけど。

春江(声) なんですって。

涼平 お母さん、どうして出て行ったんだよ。

春江(声) そうするべきだと思ったからよ。

涼平 そうするべきって、子供を捨てることか？

春江(声) もっと、ずっと大事なことがあったの。

涼平 俺や陽向よりも大事ってこと？

春江(声) そうよ。

涼平 あなたは母さんじゃない。

春江(声) じゃあ、あなたのお母さんはだれ？

涼平 俺に母さんなんていないよ。

障子の影が消える。

陽向・那津、銭湯から帰ってくる。

涼平、机に突っ伏している。

那津 ああ、とってもいいお湯だった。幸せ。

陽向 でしょ、でしょ。それに、あの絵、ヤバいでしょ？ 渉君のお父さんが

描いたんだよ。

那津 あれねえ。

陽向 あたしも久しぶりに色々な友達に会えて嬉しかったよ。

那津 陽向ちゃんのお友達、あたしのことどう思ったかなあ。

陽向 え、みんな那津さんのこと好きになったと思うよ。(牛乳を飲みながら)

那津 本当？ あ、また牛乳飲むの？

陽向 え、中毒かもね。飲む？

那津 ありがとう。そういう中毒もあるんだね。

陽向 うん。あ、お兄ちゃん寝てる。

音楽。

○バイト

六月。

鈴、お好み焼き屋の掃除をしている。

涼平・亜紀、話しながら入ってくる。

亜紀 で、いつ締め切りなの？

涼平 6月の末。

亜紀 で、どこまで進んだの？

涼平 一割……弱。

亜紀 え、間に合わなくない？

涼平 間に合わねえよ。

亜紀 間に合わなねえ。

涼平 間に合わないよ！

鈴 きみ脚本書いてるの？

涼平 え、あ、はい。あれ、片桐さん？

亜紀 知り合い？

鈴 鈴って呼んで。

涼平 ああ、すいません。いや、知り合いついていうか。

鈴 私、今日からここでバイトすることになりました。

涼平 は？

鈴 ねえ、その脚本ちよっと見せて。

涼平 あ、はい。(脚本を渡しながら)

鈴 これ書き込んでいい？

涼平 え、あ、え？

亜紀 片桐さんも、

鈴 鈴って呼んで。

亜紀 鈴さんも演劇やってるんですか？

鈴 まあね。高校でも大学でも。じゃあ、ちよっと読んでくるから。あ、掃除
終わらせといて。

涼平 え、あ、はい。え？

鈴、厨房へ入ってゆく。

涼平 俺がやんのか。

亜紀 ドンマイ。

涼平 何だかなあ。

涼平、ほうきで掃除を始める。

陽向、入ってくる。

陽向 ただいまー。あれ、お父さんは？

涼平 いない。

陽向 ふーん。

陽向、奥で鈴を発見する。

陽向 知らない人がいる。

亜紀 あれ、陽向ちゃんも何も聞いてないんだ。

涼平 あの人昨日来たお客さんなんだよ。それが今日からバイトだって。

陽向 バイト？ 何それ、家にそんなお金あるの？

亜紀 実は泥棒だったりして？(小さな声で)

涼平 大きな声出したら聞こえるだろ！(大きな声で)

陽向 お兄ちゃんの方が声大きいよ。

涼平 ……とにかく、ここは一つ冷静にだなあ。

莊司、入ってくる。

莊司 ただいま。あ、お前ら帰ってたのか。

陽向 あ、お父さん、

莊司 どうした。

陽向 えっと……。その店の奥に変なのが……。

莊司 え、ゴキブリか。

陽向 あ、いや、ちがくて……。

莊司 大丈夫、大丈夫。すぐ片付けてやっから。

莊司、その場でシャドーボクシングをして気合を入れる。

莊司、新聞紙を両手に持って過剰に怯えながら厨房へ入って行く。

莊司・鈴 うわあ、不審者だー！！

陽向 きゃあああ！

鈴 って莊司さん？

莊司 あ、鈴ちゃんか……。

鈴・莊司、奥から出てくる。

鈴 ああ、もう、ビックリした……。

莊司 ああ、ゴキブリかと思ってたんだよ。

鈴 乙女にゴキブリとは、なんとひどいことか。

莊司 いや、ごめん、そういうことじゃなくて。紹介するよ。新しくバイトに来た鈴ちゃん。

亜紀 あ、さっき聞きました。

莊司 那津の姪だ。

涼平 那津さんの姪っ子？

鈴 そう、このバイトはおばさんに紹介して貰ったのよ。

涼平 へえ、しかしよくこんな所に来ましたねえ。

鈴 いいところじゃん。雰囲気あって、なんか楽しそう。

涼平 それにお父さんバイト代払えるのかよ。

莊司 ああ、きっちり払うさ。うちだってそこまで切羽詰まってるわけじゃないんだから。

涼平 そうかねえ。

鈴 あ、君の脚本読んだけどね、あれダメじゃないかな。

涼平 そう……ですか？

鈴 理屈ばかりでストーリーが何もないじゃん。

涼平 はい……。

鈴 理屈じゃ感動できないんだよ。

涼平 でも、思いつかないんです。

鈴 思いつくもんじゃないよ。

涼平 え？

鈴 書くべきものは見つかったの？

涼平 書くべきもの？

鈴 それを見つけないと。

涼平 どこにあるんですかね。

鈴 さあ、どこでしょう。

亜紀 書くべきものですよって、涼平先生。

涼平 ……。

亜紀 あ、予備校いかないと。あたしそろそろ帰るね。

涼平 そっか。

陽向 亜紀ちゃん、じゃあね。

亜紀 またね。

亜紀、帰る。

涼平 どうすりゃいいんだよ……。

鈴 まあ、悩みすぎないことだね。考えすぎると抜けられなくなるよ。

涼平 どこから？

新田、入ってくる。

新田 こんにちはー。涼平君、誕生日おめでとう。十七になるんだっけ
涼平 はい。

新田 若いなあ。これからだもんな。色々成長する年頃だよ。

涼平 そうなんですか。

新田 あ、これプレゼント。

涼平 お、ありがとうございます。望遠鏡？

新田 大きいだろう。このレンズはな、非球面レンズという特殊なレンズでな、
俺が磨いたんだぜ。

涼平 非球面レンズ？

新田 機械だけではなかなかできないものなんだよ。焦点誤差がとても小さい。

涼平 きれいに見えるってことか？

新田 もちろん。俺が作ったしな。

涼平 すごい。ありがとうございます。

新田 大事に使えよ。

涼平 うん！

新田 あれ、この子、誰？

莊司 あ、今日からバイトに入った鈴ちゃんね。

新田 え、バイトが入るんだ？ そんな儲かったのか。

莊司 いや、その、那津の姪っ子なんだよ。

鈴 叔母さんが無理に頼んでくれちゃったんです。あたし、いつもバイトの試用期間が終わるとクビになっちゃうんですよ。

新田 へえ、またなんで？

鈴 さあ。周りの人はみんな、あたしのこと注意がないって言うんですけど。
新田 へえ。

那津、入ってくる。

莊司 あ、おう。

那津 こんにちは。あ、鈴ちゃん、ちゃんとやってる？

鈴 やってますよ。

陽向 えー、さっきサボってたじゃん。

鈴 あれは、……あれは、ゴキブリに擬態して仲間をおびき寄せてたんですよ。

莊司 うわあ、Gの話すんなよ。鳥肌たっちゃったよ。

鈴 苦手なんですか？

莊司 いいやあ〜？（裏返った声） これでも飲食やってるからね。でも、心の準備ってもんがあんでしょ。

鈴 私がいる大学の寮なんか、こんな団子になっていきますよ。（莊司の前で手で団子を作りながら）

莊司 うえ。

陽向 何それ、面白い。

鈴 あ、写真見る？

陽向 見る見る！

那津 陽向ちゃん、お店のこと色々教えてあげてね。

陽向 はーい。

鈴 よろしくお願いしまーす。

涼平、望遠鏡を持って静かに出て行く。

○女神様

夜の河原。

蝉の声。

渉、座って棒で地面に絵を描いている。

歩いてきた涼平、気づかずに渉の絵を踏む。

渉 ああ、俺の絵を踏むなよ。

涼平 あ、ごめん、ごめん。ってお前はアルキメデスカよ。

渉 何それ。

涼平 アルキメデスって、そう言って殺されちゃったんだよ。

渉 へえ。亜紀はまだ来ないのか？

涼平 ああ、一緒には来てない。

渉 そっか……。

涼平 お、あそこカシオペア座が見えるぞ。

渉 よくこんなたくさん星があるところで星座なんか見つけれられるな。

涼平 慣れればすぐわかるよ。それにカシオペア座は周りに明るい星が少ないから見つけやすいんだ。あ、ほら渉も見てみるよ。

渉 へえ、これが例のやつか。しかし、すっかり天体マニアになっちゃって。

涼平 亜紀に色々教えてもらったんだよ。

渉 あいつなんでも知ってるのな。どれどれ、お、やっぱりきれいだなあ。カシオペア座ってあのWの形したやつだろ。

涼平 ああ。

渉 あの、出っ張ってるところのオレンジ色の星がきれいだ。

涼平 ああ、シエダルね。

渉 シエダルか、いい名前だなあ。どういう意味なんだ

涼平 胸って意味だよ

渉 え？ おっぱい！ まじか、このWの形の星たち全部がおっぱいを表現してたのか！

涼平 いや、その星がたまたま王妃カシオペアの胸に位置するんだよ。

渉 いや、でも俺もうこの星座が上から見たおっぱいしか見えなくなってきたよ。

涼平 想像力豊かだなあ

渉 なあ、このシエダルじゃない方の乳首の星はなんていうんだ。

涼平 ああ、ルクバーのこと？ そこは膝だよ。

渉 膝！ 膝もいいけどさ、これおっぱいだと思って見ると楽しいぞ。

亜紀、入ってくる。

涼平 あ……。

渉 このカシオペアちゃん、いやカシオペアさんの……その、お、お、おっぱいはさ、ちよつと左右非対称だけど、それはそれでいいよね！

涼平 渉、ちよつと、

渉 なに？ あっ、てか涼平君は何カップが好き？ 俺は大きければ大きい程

好き。あ、あくまで俺の好みだけ。俺は銀河くらい大きなおっぱいがいいよ。

涼平 何言ってるんだよ。

渉 えへへ。女神様のおっぱいってどんなだろうねえ、涼平君。どう思う？

涼平 亜紀、来てるよ。

渉 え、え、う、うわおお。(跳ねのけながら)

亜紀 渉のスケベなところは昔から変わらないね。

渉 スケベってなんだよ！

亜紀 スケベじゃん。

渉 でも、真面目な話、フロイトによれば人には胎内回帰欲求するのがあってさ。おっぱいに憧れるって、まあ、ある意味自然なことなんじゃないかな。

涼平 お前、屁理屈になると気持ち悪い程賢くなるな。
渉 え、そう。しかし、流星群全然見えねえなあ。
亜紀 まったくさあ……。もう少し待ってみない？

○夏休み

音楽(ロック)。

お好み焼き屋。渉・荘司・鈴、話している。

荘司 若い人はよく食うねえ。
渉 今日から夏休みですからね。もうすぐ合宿だし。あれ、涼平は？
荘司 また脚本書いてるよ。最近、あいつ、いつ寝てるんだか。
渉 すげえな。俺もスタミナつけてがんばらなきゃ。

亜紀、入ってくる。

亜紀 こんにちは。
渉 お、よお。

亜紀 あれ、涉いたんだ。涼平は？

渉 お前らできてんのかよ。

亜紀 何イライラしてるの？ あ、涼平いますか？

鈴 脚本のことで悩んでるみたいよ。

亜紀 最近こもりすぎだと思っけど、大丈夫なの？

渉 なんだよ、涼平のことばかり心配して。俺のことも心配しろよ。

亜紀 渉は心配する必要あるの？

渉 あるある、大ありだよ。

鈴 これだけ食べてれば大丈夫でしょう。

亜紀 涼平はちゃんと食べてるんですか？

荘司 どうかなあ。

鈴 叔母さんと涼平君、大丈夫なのかなあ。

荘司 あいつは前の母親が忘れられないんだよ……。

鈴 前のお母さん……この店の名前考えた人？

荘司 よく知ってるなあ。

鈴 涼平君が言った。

莊司 やっぱりな。

亜紀 那津さんとはどうするんですか？

莊司 八月には籍を入れようって言ってたんだが。

涉 え、八月？

音楽。時計の音。

涼平、机に伏している。

ほかの人物はそれぞれの場所で後ろ向きに立っている。

涼平、目を覚ます。

涼平 あれ、寝ちゃったのか。ああ、そうだはやく続きを書かないと。いま、

何時だ。あれ、時計ってどうやって読むんだっけ？ あれ、俺はどこだ。

陽向(声) お兄ちゃん。

莊司(声) 涼平、あんまり夜更かしするなよ。

那津(声) 素敵なお名前。

鈴(声) 考えすぎると抜けられなくなるよ。

亜紀(声) 桜、もうすぐ満開だね。

涉(声) 俺の絵を踏むなよ。

春江(声) もっと、ずっと大切なものがあるの。

涼平 もう、やめてくれ。

陽向(声) 大丈夫？

春江(声) どうしたの、涼平？

涼平 もういい。記憶のくせに俺にしゃべりかけるな。

春江(声) 思い出って言ってもらいたいものね。

小鳥のさえずり。

回想、遠い春の記憶。

陽向 桜ってお母さんみたい。

春江(声) そう？ でも、あの花びらってカエルの卵みたいに見えるけどねえ。

涼平 そんなこと思うのはお母さんだけだよ。

春江(声) そうかなあ。

陽向 あれ、お母さんどこへ行くの？

涼平 お母さん！

春江(声) あっちまでかけっこしない？

涼平 お母さん待って。

春江(声) もう、遅いなあ。お母さん先に行っちゃうよ。
陽向 まってよ。

涼平 行かないで、お母さん。ねえ、どこへ行くの？

暗転。

春江(声) もっと、ずっと大切なものがあるの。

○ABCたちとFダッシュ

音楽。

明転。

河原。

亜紀・涼平・黒子・那津、それぞれABCDと書かれた白い袋を被り、手拍子をしてリズムを刻みながら入ってくる。

渉、入ってきて、激しく絵を描く。画面はモルフォ蝶、火山、隕石、食虫植物、太陽など様々なモチーフの出鱈目な配置によって構成されており、極めて色彩的。完成すると全員で拍手喝采。

渉 ふーむ。

A 亜紀 うわあすごい。

渉 え、それほどでもないよ部員Aさん。

B 涼平 やっぱり渉君うまいなあ。

渉 何言ってるんだよ。部員B君の技術にはかなわないよ。

D 鈴 評論家Fに言わしてみればカオスの根源とか不条理への問いとかいうんだろうなあ。ねえ、部員Aさん。

A 亜紀 それは評論家FじゃなくてFダッシュの方じゃないの部員Dダッシュ……じゃなくて部員Dさん。

C 黒子 でもやっぱ才能がちげえなあ。顧問Eが黙っちゃうもわけないよ。

渉 部員C君、この絵は才能じゃなくて努力だぜ。部員C君や他の部員A〜Eたちも頑張れば俺みたいになれるさ。

B 涼平 Eは顧問だよ。

渉 あ、そっか。

D 鈴 才能に溢れていながらも、努力を怠らず、そして謙虚。渉君は人間国宝

になるべきだわ!

渉 え? 部員Dさん、まじで言ってるの?

D 鈴 マジマジマジだって。

B 涼平 ほんとすごいよ。俺たちこれからも渉君について行くよ!

D 鈴 うん!

音楽、「ABCのうた」。

音楽に合わせてそれぞれが、渉を崇めるような動きをする。

渉が手を叩くと同時に全員ストップ。

渉 っと、なるはずだったんだ。

瞬間、ストップモーションがとかれ、それぞれ被っていた袋を後ろに投げ捨てる。

涼平 まあ、気にすんなくて。万人受けする表現なんてないよ。

渉 でも、合宿だぜ。せっかくこっちが気持ちよくなってるのにさ、あんな酷評されたらさすがに心が折れるよ。

黒子 だから気にすんなくて。どうせ、その部員たちってのも大した奴じゃないんだろ。

渉 え、お前誰だよ。まあいいや。

涼平 え、いいのかよ。誰?

渉 でもあいつらの言ってたこともなんとなくわかるんだ。この絵には何か根本的なものが足りない。

鈴 確かに言われてみればそんなような気もするけどねえ。なにが足りないんだろ。うーん。

亜紀 あのさ、ちょっと気になったんだけど、なんで回想のシーン、名前がみんなアルファベットだった?

渉 ああ、興味ない奴の名前、覚えられないんだ。

鈴 興味がなければ無理でしょ。

涼平 それ俺もだよ。

渉 お前、昔っから忘れっぽいもんな。それより、足りないもの、足りないもの。

鈴 なんか、ちょっととした意識みたいなものじゃないかな。

渉 意識?

黒子 どこにフォーカスしていくかってことじゃないか。

鈴 あ、なるほど。

黒子 一緒に舞台に出ている、見えない奴っているじゃん。
亜紀 そんなのいる？
黒子 ……いや、いないか。
涼平 いる……気がする。
鈴 うん、見えてないだけ。

○記憶のゴミ箱

八月。朝のお好み焼き屋。

蝉の声。

鈴・那津、話している。

鈴 おばさん、この家に住み始めてどう？

那津 楽しいわよ。住んでいれば荘司さんのこともっと知れるしね。

鈴 おばさんもの趣味は分かんないなあ。

那津 分かんなくていいのよ。

鈴 涼平君とはどう？

那津 うーん、まだ、ほとんど話せてないなあ。

鈴 そっか……。

那津 でも大丈夫。

鈴 相変わらず謎の自信凄いね。

那津 だって、涼平君も陽向ちゃんもいい子達じゃない。

鈴 それあれだよ、荘司さんに似てるからじゃない？

那津 え？ ……あ、そうかな？

陽向、入ってくる。

陽向 おはようございます。

那津 あ、陽向ちゃんおはよう。あれ、涼平君は？

陽向 まだ二階でゴロゴロしてると思うよ。

那津 そっかー。じゃあ、私これから用事があるから。お父さんも一日商店街
組合にいつてるから今日はお留守番たのみますね。鈴ちゃんこれ鍵、よろしくね。

那津、出かける。

鈴、冷蔵庫から牛乳を取り出し、口をつけて飲む。

陽向 鈴さん、それあたしの牛乳ですよ。

鈴 ん？

陽向 何飲んでるんですか。

鈴 ぶふぁ、美味しい。

陽向 ああ、もうほとんど残ってない。

陽向、残りの牛乳を飲み干す。

鈴 牛乳好きだね。

陽向 あーあ。

鈴 ……ごめんねえ。

陽向 まあ、いいですけど。ねえ、もう、八月ですよ。

鈴 あ、夏休みか。陽向ちゃんは何するの。

陽向 なにする……なにしよ……とりあえず宿題やって、あとは一日中ゴロゴロしますかね。

鈴 え、宿題？ え？ 嘘？ え？ どういうこと？

陽向 鈴さん絶対最終日にまとめてやるタイプでしょ。

鈴 当り前じゃないの。

涼平、入ってくる。

鈴 それ新しい脚本？ 読ませてよ。

涼平 こんなのは読んでもしょうがないですよ。

鈴 それっていつ上演するの？

涼平 九月です。

鈴 お、観に行っちゃおっかなあ。貸して。

涼平 (鈴に脚本を渡して)どうぞ。父さんと那津さんは？

陽向 二人とも出かけてる。

涼平 そう。

陽向 表の電気の工事、組合でお金が決まり次第やるんだって。

涼平 へえ。

陽向 明るくなったらお客さん増えるかな？

涼平 変わんねえだろ。

鈴 ……あれ、全然変わってないじゃん。

涼平 ちよつとは書いたんですけどね。才能ないんじゃないかな。

鈴 才能ねえ。ある人にはある。ない人にはない。

涼平 なにそれ。

鈴 誰もが一流ってわけじゃないんだよ。あなたの書きたいものは何？

涼平 ……なんだろう？

鈴 見つからないようじゃ仕方ないねえ。

涼平 え？

鈴 君ひとりじゃないんでしょ。他の人に頼んでもいいんじゃない？

涼平 かわりはいくらでもいる？

鈴 そういうわけじゃないんだけど。

涼平 じゃあ、これいらないね。

涼平、脚本をゴミ箱に捨てる。

鈴 え？ 何やってるの？

涼平 何って……。

鈴 それでいいの？

涼平 だって、しょうがないじゃないですか。こんなのゴミでしょ。捨てて何が悪いんですか？ 俺の平凡な人生を誰が知りたいって言うんですか。

鈴 平凡？

回想、鈴の小学校時代の教室の授業。

先生と書かれた袋を被った黒子が白い袋を持って入ってくる。

先生 完全変態の昆虫は幼虫から成虫になるときにさなぎになります。そして、

その後、さなぎは脱皮して成虫になります。これはいわば……。おや、鈴ち

ゃん、今日はずっとイスに座っていて偉いね。はい、これ被ってください。

鈴 いりません。

先生 おや、何書いてるんだい？

鈴 お話。

先生 鈴ちゃん。今、理科の時間ですよ。そのノートは閉じて、理科の教科書を出しなさい。それから、はい、これ被って。

鈴 はーい。(席を立てうろうろしながら)

先生 鈴ちゃん、ちゃんと席についてください。

鈴 はーい。

先生 鈴ちゃん、見てごらん、みんなちゃんと座っているよ。どうしてあなただけできないの？ はい、これ、被ってごらん？

鈴 わあああ！（絶叫）

先生 やめろ！

鈴、先生の被り物をはぎ取る。

先生、驚いて尻もちをつき、手で顔を隠しながら出て行く。

鈴 平凡な人間なんているわけないじゃん。表面ばかり取り繕って大事なことから目をそらしてない？

涼平 大事なことって？

鈴 誰しもが持つてる、心の奥底にあるもの。

陽向 お兄ちゃんって、平凡なのが偉いと思ってるわけ？ ばっかみたい。

涼平 え？

回想、十年前。

莊司と春江の対話。

莊司、入ってきて正面を向いて正座。

障子に女の影。

莊司 春江、俺達やり直せないかな。まだ、間に合うと思うんだけど。もう一晩考えてみるっていうのはどうか。気が変わるかもしれないだろ。変わらない。そうか。確かに、お前に音楽の才能があることはわかるよ。でも、子供が二人もいるんだぞ。育てる責任があるんだ。自分のことしか考えない奴に、子供は絶対に渡せないぞ。いらぬ。足手まとい。が、外国に行くのか。そうか、そうなんだ。わかった。わかったよ。もう、終わりなんだな。

莊司、書類に印鑑を捺す。

涼平 そうだ、俺は捨てられたんだ。

陽向 お兄ちゃん？

涼平 俺達、お母さんに捨てられたんだ。

陽向 そうだよ、今頃気がついた？

涼平、ゴミ箱からくしゃくしゃの脚本を出す。

音楽。

涼平 俺、やっぱり書こうかな。

鈴 才能なくても？

涼平 そんなこと関係ないよ。自分の物語を見つけた。俺にしか書けないものがあるかもしれない。

○川のなか

河原。

ひぐらしの声。

陽向、突然歌いだす。

渉・黒子、絵を持って入ってくる。

陽向 あ、渉君、いたのか。

渉 あいかかわらず、歌、うまいね。

陽向 え、そりやあどうも。

渉 最近、あんまり銭湯来ないね。

陽向 まあ、いろいろあつて……。絵、描いてるの？

渉 まあね。

陽向 何の絵？

渉 何って言われてもなあ……。大地かな。

陽向 へー、頑張って。

渉 あ、ちょっと待って。

陽向 なに？

渉 この絵って何が足りないと思う？

陽向 絵のことは全然わかんないよ。

渉 なんでもいいからさ。君が感じたこと。

陽向 色……。かな。

渉 色？

陽向 じゃあ、ちょっと探し物があるんで。

渉 探し物？

陽向 うん。私の中の深いところにあるもの。

渉 なんだよ、それ。

陽向 ずっと昔に忘れた。

渉 あ、陽向……。

陽向、立ち去る。

渉 色か。そうだ色だ。何で気づかなかったんだろう。色が足りないんだ。あれ、陽向？ そっちは川だぞ。おい、ちょっと待てよ。

渉、陽向を追う。

涼平・鈴、やってくる。

涼平 特別一等星でない人間はどうすればいいんでしょうか。

鈴 書きたいものがあるんでしょ？ 大丈夫。

涼平 でも。

鈴 それじゃ、あとはひとりで行きたまえ。

涼平 え？

鈴 私はここまで。あとは真っ直ぐ行くんだよ。

涼平 はい。

二人、別れて反対に向かう。

涼平 あれ？ ここはどこだ？ あ、渉！

渉、流されてくる。

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向、流されてくる。

三人、流れに飲まれる。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと。

渉 おい、このままいくと、俺達回り続けるぞ。

涼平 お前何言ってるんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中。

陽向 そう、ここは牛乳の。

渉 おい。

涼平 お前何言ってるんだ。

渉 おい。おい。おーい。待て。

涼平 何だよ。あれ、ここは。

渉 よどみを、抜けるぞ。

涼平 あれ、今の川のよどみだったのか。

陽向 なんか体が軽いね。

音楽。

渉 俺さ、ちっちゃい頃は一等星になれると思ってたんだ。でもさ、俺の親父、俺のことなんかどうでもいいんだ。せめて一度くらい認めてほしかったよ。

なあ、特別一等星でない人間はどうすればいいんだ。

陽向 渉君は渉君だよ

渉 え？

陽向 渉君は特別。だから一等星じゃなくていい。

涼平 そうか、川の底の砂や砂利の粒だってみんな違うんだ。ぼんやりと見える星たちだって。

渉 そうだったのか。

涼平 描くべきものは本当はお前の中にもうあるんだろ。

渉 うん、ようやく思い出したよ。

涼平 ≪カンパネルラ、本当の幸いは一体何だろうね。——①≫

渉 俺にはわからない。

陽向 ねえ、あそこに誰がいる。

涼平 俺たちのお母さんだ。

陽向 え、誰？ 知らない人だよ。

涼平 いや、お母さんだよ。

春江(声) 涼平、陽向、ここはあなた達の来るところじゃないわ。

涼平 大丈夫だよ、お母さん。もう迷わないから。

春江(声) どういうこと？

涼平 あなたと、俺は違う人間だから。

春江(声) そう、さようなら。

涼平 さようなら、お母さん。さあ、家へ帰ろう。

○お祝いの会

お好み焼き屋。

新田・莊司・那津・鈴・涼平・亜紀・渉・陽向・黒子、談笑。

黒子は声を発さないが周りにうまく溶け込んで会を楽しんでいる。

新田 それじゃあ、結婚と新しい家族の門出を祝って……っていいの？ あれ、今日って何のお祝い？

莊司 いや、ちよっと待って。今日は皆さん、集まっていたいてありがとうございます。ございます。お好み焼きともんじゃしかありませんが、たくさん食べてください。今日は食べ放題ですの。

渉 おっ、気前がいいですね。トッピングもいいんですか？ あ、クラゲがおいしいって聞いた。

涼平 あれはまずいよ。

那津 え、もうあたし食べてるよ。ほら。

涼平 お母さんって、ゲテモノ趣味だからね。

那津 え、今なんて言ったの？

涼平 ゲテモノ趣味。

陽向 その前だよ。

涼平 え？ なんか言ったっけ？

那津 お母さん。

涼平 ああ。

莊司 初めて言ったな。

新田 なるほど、お前も変わったな。

涼平 そうかなあ。

莊司 あ、それで……実はみなさんに大事な報告があるんだ。涼平と陽向にはもう言ったんだけど。

鈴 大事な報告？

新田 なんだよそれ。

那津 えっと、実はですね。赤ちゃんを授かりまして。

新田 っへ？

鈴 え、すごい、それはおめでとうございます。

莊司 そういうわけで……。あの、はい。

新田 ああ、分かった分かった。那津さんのご懐妊をお祝いして、乾杯。
全員 乾杯。

渉 でも、陽向がお姉さんになるのか。大丈夫なの？

陽向 なに？ なんか不安ですか？

渉 いや、まあ。

陽向 こう見えてあたしだって色々悩んで大きくなってるんだからね。

渉 分かってるよ。

亜紀 そうそう、脚本は書けたの？

涼平 まあ、なんとか。

鈴 お、じゃあ皆で観に行けるな！

涼平 え、鈴さんも来んの？

亜紀 楽しみだね。

涼平 あ、亜紀ってさ、進路とか決めた？

亜紀 なに急に？

涼平 いや、理系は地方の受験とか多いしさ。どうすんのかなど。

亜紀 私は東京の大学受けるよ。物理学科にしようと思ってる。

涼平 いいね。

亜紀 あれ？ 難しそう〜って言うと思った。

涼平 難しそうだけど、亜紀らしいなと思って。

渉 亜紀は相変わらずだな。知らんところでぐんぐん伸びてく。すげえよ。

亜紀 んん？ そうかな？

渉 俺も牛乳たくさん飲んでぐんぐん伸びていきな。

亜紀 いや、牛乳って身長とあまり関係ないんだって。

陽向、牛乳をこぼす。

陽向 嘘？！

那津 ああ、陽向ちゃん大丈夫？(雑巾を出しながら)

陽向 大丈夫。お母さんは座ってて。ああ、もうまじかよお。

鈴 どんまい。

暗転。
音楽。

○ミルクィウェイ

涼平・陽向、二人とも白い袋を被っている。
涼平、懐中電灯をつける。

涼平 お前はいつたい誰なんだ？

陽向、懐中電灯をつける。
那津、入ってくる。

陽向 お兄ちゃん、探してるもの見つかったの。

涼平 素直で可愛かった頃の俺？

陽向 そう。

涼平 いや、もうどうでもいいんだ。俺は俺だ。

那津 そうね。

涼平 (袋をとって)あ、母さん。

明転。

那津 見て、星がきれいよ。

涼平 うわっ、すげえ。お前もとってみろよ。

陽向 え、うん。(袋をとる)

那津 あの星とあれとあれとあれをつないだら、涼平君と陽向ちゃんに見えるね。
ほらほら。

涼平 どれどれ

陽向 想像力たくましすぎ。

亜紀・渉・荘司・新田・鈴・黒子、無音で楽しそうに
笑いながら入ってくる。

亜紀、望遠鏡を持ってきて、舞台中央に置く。

涼平、望遠鏡をのぞく。

亜紀 《このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさん、そうでしょう。——①》

涼平 うん、見えるよ。亜紀も見てみる？

亜紀 うん。天の川って、ミルキーウェイっていうじゃない？ ミルクをこぼしただなんてちよつとかわいいよね。

涼平 そうだね。

音楽。

暗転。

音楽に合わせてそれぞれの人物が隠し持っていた手元灯りを点滅させる。

それらは闇の中にくつもの星座を形作る。

音楽とともに、全ての光が瞬間的に消える。完全な闇。

【引用文献】

- ① 宮沢賢治 『宮沢賢治全集7』 ちくま文庫
- ② 吉田兼好 『徒然草』

初演 神奈川県 桜美林大学・プルヌスホール 二〇一七年八月二十六日

【演出上の注意等】

- ・当作品はもともと高校演劇向けに執筆した戯曲であり、上演時間は60分弱を想定しています。ギリギリの尺なので是非場転を工夫してみてください。
- ・作品の持つ性質を損なわない範囲での科白の語尾や言い回し等に関する改変は自由に行うことができます。ただし、シーンのカットや追加、キャラクター設定の大幅な変更を希望される場合は必ず作者にご連絡ください。
- ・改稿をご依頼される場合はお気軽にご連絡ください。ただし、場合によってはお受けできない可能性もございますのでご了承ください。
- ・黒子の衣装は劇場用の黒装束が望ましいです。ただ、重要なのは顔が隠れていることなので黒い仮面でも差し支えないと思います。
- ・登場人物が被る袋の素材は自由ですが、亜麻・ガーゼ・不織布等確実に呼吸のできるものを使用してください。
- ・ラストシーンでは手元明かりで星々を表現する部分があります。客席が近い時はセロファン等を使用して光量をよく調節するとよいと思います。
- ・当作品には絵を描くパフォーマンスが含まれています。ただ実際に舞台上でペンキが使える可能性は限られているので、ライブで描く必要はありません。
- ・その他、ご不明点、作品の解釈、初演時の使用楽曲や演出に関してのご質問・ご相談があればお気軽にお問い合わせください。